

台湾の大学生を対象にした自伝的記憶の感情価に関する研究

○兵藤宗吉 (中央大学)

李 岩 (中央大学)

キーワード：自伝的記憶，感情価，台湾の大学生

問題・目的

これまでの一連の研究から，小，中，高校時代などの，「時代」をもとに自伝的記憶を想起させる場合(兵藤・野内, 2004, 2005, 2006)，および，「親」や「進路」といった「想起テーマ」をもとに想起させる場合(兵藤・佐藤, 2014)において，想起された出来事の感情価ごとの割合は快・不快・中立の順にほぼ 5:3:2 になる，あるいは快な出来事が不快な出来事より多く想起されるという結果が得られている。これらの結果は，斎藤 (1993, 1994) と一致する一方，自伝的記憶の想起の安定性を検討した神谷 (1993, 1994) のように不快な出来事の方が快な出来事よりも多く想起されたという結果も報告されている。本研究では，台湾の大学生を調査対象として，中学時代，高校時代に関する自伝的記憶の想起された出来事の感情価について検討した。

方 法

実験参加者 36 名 (男性, 9 名, 女性 27 名, 平均年齢 20.28 歳, 範囲 18-23 歳)

実験デザイン 1 要因 2 水準 (想起テーマ：中学時代・高校時代; within) の参加者内計画であった。

手続き 実験は大学の講義後，集団法で実施された。自伝的記憶想起課題では，ページ上部に書かれた「中学時代」あるいは「高校時代」のいずれかの想起テーマに関する「現在の自己に影響を与えた自分自身に起こった出来事」を 5 分間，思い出した順に，できるだけ多く記述するよう実験参加者に求め，それぞれの出来事について 1 行ずつ記述させた。自伝的記憶想起課題および想起後の気分評定を終えた後は，想起された出来事すべてに対して感情価 (1 ととても不快～5 ととても快)，重要度 (1 全く重要でない～5 ととても重要である)，鮮明度 (1 全く鮮明でない～5 ととても鮮明である) を

評価させた。実験に要した時間は 20 分程度であった。

結 果

記入漏れのあった 2 名のデータを分析から除外した。Table 1 は想起テーマごとの想起数，感情価，重要度，鮮明度の平均値および標準偏差を示したものである。想起数，感情価，重要度及び鮮明度について，それぞれ (中学時代・高校時代) を要因とした対応のある t 検定を行った結果，想起数においては有意な差は認められなかった ($t(35) = 0.33$, $n.s.$)。感情価においては高校時代のほうが感情価の評定値が高い傾向にあった ($t(69) = 1.90$, $p = .07$)。重要度と鮮明度において，それぞれ有意な差が認められ ($t(35) = 2.61$, $p < .05$) ; ($t(35) = 2.15$, $p < .05$))。「高校時代」のほうが「中学時代」よりも重要度鮮明度が高かった。

Table 1 想起テーマごとの感情価・重要度・鮮明度の平均値および標準偏差

		中学時代		高校時代		t 値
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	
想起数	平均	8.22		8.33		0.33 ^{n.s.}
	標準偏差	(3.10)		(2.90)		
感情価	平均	3.07		3.35		1.90 [†]
	標準偏差	(0.71)		(0.72)		
重要度	平均	3.61		3.81		2.61 [*]
	標準偏差	(0.54)		(0.54)		
鮮明度	平均	3.74		3.95		2.15 [*]
	標準偏差	(0.78)		(0.69)		

† $p \leq .10$, * $p \leq .05$, ** $p \leq .01$, *** $p \leq .001$

次に，感情価評定の値ごとに，評定値 1, 2 を“不快”，評定値 3 を“中立”，評定値 4, 5 を“快”として分類を行い各条件の感情価ごとの想起率を算出した。(Table 2)

Table 2 各条件における想起された出来事の快・不快・中立の割合

	中学時代			高校時代		
	快	不快	中立	快	不快	中立
割合(%)	41.6	36.0	22.4	47.4	29.2	23.4

考 察

これまでの一連の結果と一致し，台湾の大学生においても感情価に関しては，快：不快：中立の順であることが確認できた。ただし，中学校においては，不快が日本のデータと比べて多いことが注目される。